

第問 次の文章は『十訓抄』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

和泉式部、保昌が妻にて、丹後へ下りけるほどに、京に歌合うたあわせのありけるに、小式部内侍、^A歌詠みにとられて、歌を詠みけるを、定頼中納言 ^aたはぶれて、小式部内侍 ^イありけるに、「^B丹後へ遣はしける人は ^b参りたりや。」¹心もとなく ^cおぼすらむ。」と言ひて、局つぼねの前を ^ハ過ぎられるを、御簾みすより半なからばかり出でて、わづかに直衣なほしの袖をひかへて

大江山いくの道の遠ければまだふみもみず天の橋立

と詠みかけけり。 ^ニ思はずに、 ^cあましくて、 ²いかに、 ^Cかかるやうやはある。」とばかり言ひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて逃げられけり。

小式部これより歌詠みの世に覚え ^ホ出で来にけり。

これは ^eうちまかせての理運のことなれども、 ³卿の心には、これほどの歌、ただいま詠み出だすべしとは、知られざりけるにや。

注 ○小式部内侍——和泉式部の娘。 ○理運——当然であること。

問一 文中の波線部 ^イ ^ホの動詞について、例にならつて、活用の種類と活用形を答えよ。

(例) 行よきて ↓ 力行四段・連用形

問二 文中の傍線部 a、b、c、d、e の解釈として最も正しいものを、次のそれぞれのア～オのうちから選べ。

a たはぶれて

ア 狂乱したふりで イ みだらな様子で ウ 浮気な様子で

エ 好い加減な態度で オ ふざけて

b 参りたりや

ア やって来ましたか イ 登場しましたか ウ 行って来ましたか
エ 帰って来ましたか オ 出かけましたか

c 心もとなく

ア はっきりせずぼんやりして イ 心が滅入ってしまいそうに ウ 待ち遠しくじれったく

エ 心ここにあらずで オ 頼りがいがなく

d あさましくて

ア 興奮であるほどで イ 驚きあきれて ウ あさはかに思っ

エ 嘆かわしいほどで オ 卑劣なくらいで

e うちまかせて

ア ありふれたことで イ ひとなみのことで ウ まかせておいて

エ めだたなくなつて オ 気がまぎれて

問二 文中の空所1く3にはいる語として最も適当なものを、次のアくカのうちから選べ。

ア こは イ これ ウ かは エ かの オ いか カ いかで

問四 文中のA「歌詠みにとられて」とは、どういうことか、次のアくオのうちから最も適当なものを選べ。

ア 歌合わせの歌を選ぶ仕事を命ぜられて イ 歌合わせの歌人として選ばれて

ウ 歌を考えて作るように命ぜられて エ 歌が母親の代作ではないかと思われて

オ 歌を他の歌人に取られて

問五 文中のB「丹後へつかはしける」とはどういうことか、次のアくオのうちから最も適当なものを選べ。

ア 丹後の親もとのからの使いが歌合わせに出す歌を届けてきたこと。

イ 母親が代作しているという噂を確かめようとしたこと。

ウ 定頼中納言がたわむれに、母親の所へ応援を頼んだかと問いたこと。

エ 定頼中納言が、母親からの応援が到着したか心配で尋ねたこと。

オ 小式部が親の所へ使いを出して歌合わせに出す歌を取りに行かせたこと。

問六 文中の和歌の説明として、**適当でないもの**を、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 和歌の技巧として、掛詞を巧みに用いて、問いかけに応えている。

イ 「ふみもみず」は「踏みもみず」と「文も見ず」とを掛けている。

ウ 「大江山」「生野」「天の橋立」と丹後の国までの地名を巧みに織り込んでいる。

エ 「天の橋立」を詠みこんで、遠くて「踏みもみず」と母親の所へは行ったこともないと適切に縁語を使っている。

オ 「いくのの道」は、丹後の国への「生野」を通って行く道の地名と「行く」とを掛けている。

問七 文中のC「かかるやうやはある」とは、どのようなことを指しているか、次のア～オのうちから最も適当なものを選べ。

ア 心配で言葉を掛けたのに返事もしないこと。 イ 直衣を押さえるなど失礼なこと。

ウ このように即座に歌を詠めるということ。 エ 唐突に歌を詠みかけられたこと。

オ 挨拶もしないで歌を詠みだしたこと。